

ドラマ『ダウントン・アビー』の成功—英国貴族 という観光資源

佐 藤 郁*

1. はじめに

20世紀初頭の英国貴族の邸宅を舞台に繰り広げられる、伯爵一家とその使用人たちをめぐる人間ドラマ『ダウントン・アビー』（原題：Downton Abbey）はロンドンのテレビ番組制作会社カーニバル・フィルムズ社が制作、英国ではITVという放送局で2010年秋から第1シリーズが放映された。このドラマはタイタニック号沈没（1912年）のニュースが伯爵のもとに届くところから始まり、第一次世界大戦、アイルランド紛争、婦人参政権運動などの時代背景を忠実に描き、細部まで本格的に再現された衣装や調度品が創り出す世界観が世界中の人々を魅了してきた。本国英国では2015年秋に最終となる第6シリーズが放送され、最終回は英国内で約40%という高い視聴率を記録したと報じられた。エミー賞、ゴールデングローブ賞など多数の賞に輝いてきたこのドラマは、250の国で放映され、好評を博し、特に米国では50%近い視聴率を記録した回もあったという。日本では2014年にNHKが放映を始め第3シリーズまで終了、2016年1月から第4シリーズの放送が予定されている。

ダウントン・アビーとは邸宅の名称であるが、アビー（abbey）は僧院や大邸宅を意味する語であり、その名にふさわしい壮麗な屋敷がドラマの舞台となっている。屋敷はイングランド北部のヨークシャー州にあるという設定だが、実際のロケ地となっているのはイングランド南部のハンプシャー州、実在の貴族カーナヴォン伯爵一家が住むハイクレア城である。ロンドンから約1時間という立地条件もあり、ドラマのヒット以来、国内外から訪れる観光客が後を絶たず、一般公開のチケットは入手困難となっている。カーナヴォン家に限らず、邸宅の維持費確保のために内部や庭園の公開、アフタヌーンティーや食事の提供、グッズの販売、ホテル営業等によって収入を得ている貴族は少なくない。日本でも「英国マナーハウスに泊まる」と銘打ったツアー旅行が多く販売されている。このように、訪れる外国人客が自国では味わえない雰囲気を楽しめる英国貴族の邸宅とそれに関わる歴史や文化は、紛れもなく他国の観光客を引きつける重要な観光資源となっており、ドラマ『ダウントン・アビー』はその宣伝に大きな役割を果たしたことになる。本稿はドラマの成功に裏付けられる、「英国貴族」という英国特有の一つの文化を、観光資源という視点から見直すことを試みるものである。

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

2. 英国王室と英国貴族の現在

英国における貴族の頂点がエリザベス女王を筆頭とする王室である。世界の独立国家で王室をもつのはイギリスを含む27の国にのぼり、ヨーロッパではオランダやスペインなど10の国が王室を有している。その中でも日本の皇室と交流歴の長いイギリスの王室は、日本においては抜群の知名度があり、注目度が高い。現エリザベス女王の在位60周年祝賀式典（2012年）には天皇皇后両陛下も招かれ、式典や祝賀会の様子が日本でも報道された。現在英国で王族の称号を持つのは女王を含む24名である¹⁾。

英国の調査会社 Ipsos MORI が毎年実施している王室に関するアンケートによると、「英国は君主制を維持し続けるべきか」という質問に、約77%が「はい」と回答している（2013年）²⁾。また、「イギリス人として誇りに思うことは」という質問（2012年、複数回答可）に対しては、36%が「王室」と回答している。チャールズ皇太子夫妻が離婚（1996年）、ダイアナ元皇太子妃が悲劇的な交通事故死をとげた1997年ころには王室への批判が高まり、その後王室は人気回復に躍起となった。2012年6月にNHK BSプレミアムで放映された番組「女王陛下のおサイフ〜華麗なるロイヤルファミリー・ビジネス」（君塚直隆監修）によると、王室はPRの専門家の助言を受け、イメージアップを戦略的に進めたという。1997年に王室公式HPを開設、誰でも女王に対し直接メールを送ることができるようにした。最近ではフェイスブックやツイッターも活用している。王族のメディアへの露出度を増やし、エリザベス女王の服装の色を明るくするなどした。こうした試みにより支持率は回復をみせ、皇太子がカミラ婦人と正式に再婚したのは、「ほとぼりが冷めた」という雰囲気が国民の間に広まった、ダイアナ妃死亡の8年後（2005年）のことであった。

チャールズ皇太子は地味な趣味や離婚問題などのせいもあって国民にはあまり人気がなく、王室メンバーの中でダントツの人気を誇る1位のウィリアム王子（支持率62%）に対し、5位の21%に甘んじている。また、同社のアンケート調査で「チャールズ皇太子はウィリアム王子に王位継承権を譲るべきか?」という問いには52%が「いいえ」と回答しているものの、「はい」という回答も35%あり、ここでも皇太子の不人気と王子の人気ぶりが見て取れる。ウィリアム王子は2011年にキャサリン妃と結婚、その後二人の子どもが生まれた。王子と同じ名門大学の出身であり才色兼備のキャサリン妃は常にそのファッションが注目される。妃が身につけている服がどこのブランドのものであるかなどの情報はインターネット上で直ちに広まり、同様の品がすぐに売り切れ、デザイナーは一躍有名人となる。このように、一般家庭出身で名門大学を卒業、服装も廉価で知られたいわゆるファストファッションを時折とり入れるキャサリン妃は、「新しく開かれたスマートな王室」のイメージを世界中に定着させるのに大きな役割を果たしている。王子一家の影響力は強く、第二子のシャーロット王女出産の経済効果は360億円と報じられた。王子がイートン校を卒業する際、どこの大学に進学するかが注目され、大学名が明らかになると、世界中の女子学生の志願者が増えたということも当時話題になったが、ジョージ王子が成長し大学進学や結婚適齢期を迎えればふたたび同じような現象が起こるであろう。この先も王子一家は内外から注目を集め、彼らにゆかりのある場所や品物は間違いなく立派な「観光資源」として英国の貴重な収入源のひとつとなっていくだろう。

そのウィリアム王子の称号は His Royal Highness Prince William, Duke of Cambridge とい

う³⁾。英国の爵位には、公爵（Duke）から士爵（Knight）まで6つの称号があり、そのうち世襲貴族は約750人、一代貴族が約600人いるという。一代貴族とはその名のとおり、功績を讃え本人一代限りに与えられる爵位であり、首相や国会議長、最高裁判事などが引退後に与えられることが多い。また、高い位にある聖職者も「聖職貴族」として爵位を与えられる。最も高い位の公爵（Duke）の称号を持つのは34名だが、そのうち世襲貴族は32名、王族ではエジンバラ公（エリザベス女王の夫）、チャールズ皇太子、アンドリュー王子（エリザベス女王の次男）、グロスター公（エリザベス女王のいとこ）、ウィリアム王子の5名である。日本人がイメージする「王族ゆかりの高貴な生まれで豪華な家屋敷を所有する裕福な人たち」にあたるのは「世襲貴族」ということになる。しかし、現在の英国に貴族を優遇する法律はない。女王ですら個人資産を持ち、税金を納めており、貴族はいずれも所有する資産に応じた納税義務がある。代々伝わる広大な土地や屋敷を維持していくだけでもかなりの費用がかさみ、中には莫大な維持費と相続税などを捻出できずに没落していく貴族もあり、現代では必ずしも「貴族＝裕福」というわけではなくなっている。1895年に歴史的建造物の保護活動を行うボランティア団体ナショナル・トラストが設立された後は、屋敷や敷地の管理をこの団体に委託し邸宅の一部をホテルや博物館にして有料で公開し、その収入でやりくりしている貴族も少なくない。

2014年12月にNHKで放送された番組『「ダウントン・アビー」の舞台 ハイクレア城の秘密』やハイクレア城のHPによると、ダウントン・アビーのモデルとなった城の敷地は約400ヘクタール、東京ドーム85個分に相当し、城は300年以上の歴史を持つ。年間の維持費は1億円以上のほり、使用人は最も多い時で約60人、現在は約20人がいるという。現在の当主第8代カーナヴォン伯爵夫妻の知人で脚本家のジュリアン・フェローズ氏は実際ここを訪れ、一つ一つの部屋に具体的なイメージを持たせ、それをドラマに採用した。ドラマの成功のおかげで、この屋敷を訪れる観光客は年間約6万人にもなり、その収入が巨額の維持費の一部を賄うこととなった。伯爵は番組の中で「私たちの役割は城を長期にわたって守る管理人のようなものです」と述べているが、屋敷や庭園、敷地が大きく立派であればあるほど、その維持費は相当なものとなる。

ドラマ『ダウントン・アビー』の中でも、グランサム伯爵は代々続いてきた伯爵家の財産や伝統を守りぬくために日々心を砕いている。伯爵夫人のコーラはアメリカの富豪の娘で、その莫大な持参金で伯爵家の財政危機を救ったという設定になっており、また、伯爵自身がカナダの鉄道会社への株の投資で大損害を受けたとき、それを救ったのは長女メアリーの夫マシューで、亡くなった婚約者から贈られた遺産によって補填された。ドラマの中の話、没落の危機は決して大げさなものではなく、実際の英国貴族の多くが体験し、苦慮している問題なのである。

故ダイアナ元妃の父エドワード・スペンサー伯爵とその妻レイン夫人（後妻）は、ノーサンプトンシャー州に所有する広大な土地と屋敷の維持費捻出のために屋敷内の美術品を次々と手放さざるを得なかった。夫人が所有し、ダイアナ妃も一時期暮らしたことのあったロンドンのアパートも売却された。そして現在はダイアナ妃の弟であるチャールズ氏が当主となり、2005年からは邸宅を一泊1000ポンド（約20万円）で開放しているほか、結婚式場としての営業をするといったビジネスを展開している。挙式と、かつてチャールズ皇太子とダイアナ妃が使っていたベッドルームでの宿泊がセットになったパッケージもあり、「現代のシンデレラ」と騒がれたダイアナ妃をリアルタイムで知っていた世代の女性にとっては、まさにお姫様気分を味わえる場所であろう。皮肉なこと

ではあるが、多くの人々がここを訪れるのは故ダイアナ妃への関心や哀悼の意ゆえである。チャールズ氏は館の公開のため故ダイアナ妃をしのぶ小さな建物をつくり、亡くなった姉もまたスペンサー伯爵家にとっての大事な観光資源の一要素となってしまった。しかし、時が流れダイアナ妃のことを直接知らない世代が増えていけばその威光は薄れていき、あらたな呼び物をつくりだす必要に迫られるかもしれない。

一方、その歴史のある広大な屋敷という彼らに特権的に与えられた「資産」をうまく活かした事業や投資を行って、独自に資産家として名を馳せる実業家貴族もいる。ロンドンの一等地を握る4大名家の一つグロブナー家は、300年以上も前からロンドン屈指の高級住宅街メイフェア、ベルグラビア地区の開発を担ってきた。現在の当主ジェラルド・キャベンディッシュ・グロブナー氏(1951年ー 第6代ウェストミンスター公爵)は、グロブナー・グループという一大企業の経営者で、米国、オーストラリア、日本など世界17カ国でホテル事業などのビジネスを展開している。個人の資産は推定約1兆5000億円で(2014年米国「フォーブス」誌発表による)、英国長者番付では第3位にランクインしている⁴⁾。先祖が残してくれた莫大な資産があったとしても、グロブナー氏自身にビジネスの才覚がなかったらこのような成功はなかったであろう。しかし、グループの象徴であるグロブナーハウス(ロンドン中心部のホテル、1929年開業)が長く貴族や有名人に愛用され親しまれてきたことを鑑みれば、貴族としての地位や称号が国内外のビジネスにおいて氏自身を「ブランド」化し、ビジネスの上で有利に働いたことは否めないだろう。

いずれにしても、現代の貴族はその「貴族」としての価値を維持するためにはビジネスセンスが必要ということなのである。上にも述べたように、今ウィリアム王子一家は英国の名だたる観光資源の一つとなっているが、それ以前から王室は自らを売り込む努力を始めていた。契機となったのは皇太子の不倫と離婚、ダイアナ妃の事故死、そしてウィンザー城の火災による巨額の損失であった。しかし王室はその苦境を見事に乗り切り、今は英国最強のビジネスマン、実業家そのものとなっている。

3. ドラマ『ダウントン・アビー』の成功

言うまでもなく、イギリスは現在でも階級社会である。法律上貴族への優遇や特権はないが、社会慣習としていまだ続いている。階級社会ではないアメリカの視聴者を含む外国人が、そうした世界に興味を持つことは当然だが、自分たちの文化とは異なる異文化世界を描くドラマをのぞき見たところ、そこで繰り広げられる人間模様には、驚くほどの現代性と普遍性、そして自分たちとの共通性をたっぷりと見ることができるのである。キャサリン妃も『ダウントン・アビー』の大ファンで、2015年3月には妊娠中の大きなお腹をかかえ、ロンドン内の撮影スタジオを訪問した。

『ダウントン・アビー』は時代劇であると同時に人間ドラマでもある。失われた時代のロマンを濃厚に味わわせてくれるシチュエーションではあるが、そこに渦巻くのは人間の愛憎劇である。まず第1シリーズから第3シリーズの中心となる、グランサム伯爵夫妻の長女メアリーの結婚問題を例にあげてみよう。メアリーは庶民を鼻であしらひ、貴族として生きること誇りを持つプライドの高い女性で、財産を守るために自力で良縁を見つけようとするが、政略結婚と長子相続制には強

い反発を示す。いったんはすげなくした男性マシューに対し心惹かれ始めると、今度はなかなか素直に本心を打ち明けられない。そのうちに、自分自身のスキャンダルが公になるのを防ぐために好きでもない男性と婚約してしまう。視聴者は当初、プライドが高く使用人に対しても必ず一線を画した高飛車な態度をとるメアリーの言動に鼻持ちならないと少々嫌悪を感じながらも、素直になれない一人の女性の顔を見るや、彼女の味方となってしまうのである。戦争で重傷を負い障害者となったマシューを支えた婚約者の悲劇的な死など、いくつもの障壁を乗り越え、ついに二人は結婚し子宝を授かり、これでやっと伯爵家を守ることができると安堵したのも束の間、マシューは交通事故を起こし帰らぬ人となる。打ちひしがれ子育てにも身が入らぬメアリーだったが、やがてマシューの意思をついで伯爵家の資産や土地・屋敷を守り発展させていくことが自分の使命と思い至り、立ち直っていく。

また、次女のイーディスは姉メアリーに比べ平凡な女性で、三姉妹の中では目立たない存在だったが、戦時中の看護体験や失恋を通じて自立していき、戦後は当時まだ珍しかった女性ライターとして新聞に記事を書くまでになる。そして三女のシビルもまた、戦時に看護師となり自立して働くことの充実感を忘れることができず、籠の鳥のような伯爵令嬢の生活には耐えられなくなる。婦人参政権運動にも参加し、後にはアイルランド出身の使用人と駆け落ちする。母親の伯爵夫人コーラ、祖母のヴィオレッタなど、本作に登場する年代の違う女性たちは、それぞれ時代の価値観を色濃く体現しながら、第一次世界大戦前夜の不穏な空気が近づく中で、おのおのの信念が揺らぎ、葛藤し、古い価値観と新しい価値観がせめぎ合う様子が浮き彫りになる。

ここに見られるのは、イギリスの貴族階級という特別な世界だけにしか存在しないような特異な女性の姿ではなく、どこの国、どの階級の女性にも起こりうることを経験し強くなっていく女性たちの姿である。例えばメアリーのように、日本にも戦争で夫を早くに失い、波乱万丈の人生を歩んだ女性は大勢いたはずだ。親が決めた相手との結婚は現代では少なくなっているものの、感情のすれ違いは誰も経験することであり、不慮の事故死もめずらしいことではない。とは言ってもメアリーはやはり伯爵令嬢としての気品、教養、プライドを兼ね備えた女性であり、グランサム伯爵家を中流の一般家庭に置き換えることはできない。置き換えれば、日本のいわゆる朝ドラで度々描かれる、戦前～戦後をたくましく生き抜いたヒロインの物語になるだけだ。『ダウントン・アビー』で描かれるこうした時代の変化は、男性の考え方や生き方にも大きな影響を与える。家長であるグランサム伯爵は、弁護士マシューや娘たち、使用人、妻との関係性の中で、どちらかといえば受け身ではあるが、じわじわと変わらなければならないことを感じて変化していく。誰にでも共感できることを「格調高く」描いたことと、イギリスのような階級社会でしかできないこの設定の妙が、ドラマ大成功の最大の要因である。

では次に、ドラマにおける伯爵家の使用人たちの役割、存在意義はどうであろうか。伯爵家に忠実でまじめな執事、ベテランながら裏では意地の悪い侍女、平気で嘘をつく下僕など、出自も過去もキャラクターも様々である。伯爵家の人物たちにある「血縁」というつながりが、使用人たちはなく、ときには昇進を狙って競い合い蹴落とし合うライバルになることもある。視聴者は彼らに例えば職場の人間関係を投影して見るのかもしれない。使用人たちのなかには歴然とした上下関係があり、その筆頭のお堅い執事から、行きずりの客人と一夜をともにして身ごもり追放されるあばずれのメイドまで、私たち自身が長い人生の中、学校や職場や地域で出会う人たちの中に多かれ少な

かれそれと似たような人がいるのではないか。そしてもしかしたら、それは私たち自身なのかもしれない。昇進したくて同僚を出し抜こうとしたことがあるかもしれない。行きずりの人と恋に落ちたことがあったかもしれない。このような敷居の低さが、国境を越えて多くの人々に愛される理由でもあるのだが、それだけでは批評家たちが絶賛する秀作シリーズとは成りえない。本作が最も優れている点は、格差社会の縮図とも言うべき、貴族と使用人の世界をきっちりと対比させた2層構造と、時代背景を巧みに取り入れた問題意識や社会派の要素にあるだろう。

このような明確な階級制度の中においても、貴族と使用人の葛藤は大きく共通していると言えるだろう。昔ながらの伝統や慣習を重んじる（固執する）者、それらを当然のことと受け入れながらも“古い”“変えるべきだ”と感じている者、さらには新しい時代の幕開けに自らの手で運命を切り開こうとする者たち。それぞれの階級の枠組みの中で、彼らは変わらないことのよさと変わることの必要性和、変化の中でおのおのがどう生きるかという選択を迫られる。これは、今の時代にも通じるものがあるのではないだろうか。ドラマとして、伯爵家の人物だけを色濃く描き、使用人たちはほとんど脇役に据えることも可能であったはずだ。しかし、そうせずに2重構造の小社会を詳細に描くことで、幅広い年齢の男女、そして世界中の人々に共感と感動を呼び、大ヒット作となって6年間にわたり第6シリーズまで制作されたのである。

企画・製作総指揮・脚本を手掛けるジュリアン・フェローズ氏は、彼自身が貴族の家系に属しており、男爵の爵位を持つ貴族院の議員でもある。ロバート・アルトマン監督の映画『ゴスフォード・パーク』（2001年）でアカデミー賞脚本賞を受賞した多彩な才能を持つフェローズ氏だが、自身が体験し、よく知る世界だからこそ、ディテールまでリアルに描くことが可能となったのだろう。

英国ドラマは『ダウントン・アビー』や男優ベネディクト・カンバーバッチを一躍世界的な大スターに押し上げた探偵ドラマ『SHERLOCK/シャーロック』（BBC制作、2010年－）に代表されるように、質の高さがひとつのブランドとなっている。質の高いドラマの制作には当然高額な制作費が必要となり、本国で1回限りの放映では元はとれない。初めから、国内のケーブル局や他国放送局への番組販売、DVD化、映画化を前提とし、何度も鑑賞に耐えうる質の高い、そして時代の流れに左右されにくい普遍性を備えた作品を作ることを心がける。

丁寧な作品作りを可能にしている理由のひとつには、1シーズン話数が少ないことが挙げられる。制作費は極力削らず、話数を減らし、無理に次のシーズンを早く送り出すことをせず、じっくりと時間をかけて納得のいくものを提供している。これほど世界中で人気を誇る『ダウントン・アビー』でも、1年に1シーズン8話＋クリスマススペシャルの計9話（シーズン1のみ7話）というペースを維持した。アメリカでもイギリスでも、近年は視聴者参加型のコンペティション番組のような、「リアリティショー」と呼ばれる類の番組が高い視聴率を記録しているが、結果がわかった後の再放送や録画視聴、DVDのセールスなどでは稼げないのが、リアリティショーの弱みでもある。そこで今一度、重要性を増しているのが、世界に通用する質の高いドラマ作りなのである。

4. 観光地としての英国

国連世界観光機関の資料によると英国を訪れる観光客は年間約 3,260 万人（2014 年）にのぼり、世界第 8 位である⁵⁾。（1 位はフランスで約 8,380 万人。）この数字を見ると、観光地としての英国はそれほどの人気ではないと思われるが、滞在日数では他国を引き離れたダントツの 1 位となっている。森記念財団が発表している「世界の都市総合力ランキング」（2014 年版）では、前年度に続きロンドンが総合力 1 位に輝いているが、審査の対象となる 5 分野（経済、研究・開発、文化・交流、居住、環境、交通・アクセス）のうち、観光に重要な「文化・交流」分野では、特にポイントが高い。「文化・交流」分野の内訳は、「交流・文化発信力、集客資源、集客施設、受け入れ環境、交流実績」となっており、直接観光と結びついていることがわかる⁶⁾。同じ森記念財団の調査では、ロンドンを訪れる外国人訪問者の平均宿泊数は、ロンドンが 6.25 日で 1 位、東京が 2 位で 2.98 日、3 位がパリの 2.37 日となっており、ロンドンを訪れる外国人の数は多くないように見えるが、滞在に多くの時間を割いている実態が裏付けられる。もちろんロンドンを訪れる外国人すべてが観光目的というわけではないが、商用や短期語学研修等で訪れる人がついでに観光をすることも多いだろう。何がロンドンを魅力的な観光都市にしているのだろうか。日本の大手旅行会社が販売しているツアー旅行でロンドン観光の定番となっている名所を、それらに相当すると考える東京の名所とを筆者独自の判断で比較してみたものが表 1 である。

この比較を見ると、世界中の人々を引きつける都市ロンドンでの観光がいかにお金を必要とするかがわかる。上記すべてのスポットを観光するとしたら、ロンドンでは約 24,360 円かかり、一方

表 1

			見学	入場料	記念品・土産物店	飲食店
1	a	バッキンガム宮殿	夏期限定・予約要	約 4,100 円から	あり	あり
	a'	皇居(建物内入場不可)	予約要	無料	なし	なし
2	b	国会議事堂（英）	予約要	約 3,600 円から	あり	あり
	b'	国会議事堂（日）		無料	あり	なし
3	c	大英博物館		無料	あり	あり
	c'	国立博物館（上野）		620 円	あり	あり
4	d	ロンドンアイ(観覧車)		約 3,870 円から	あり	近隣にあり
	d'	パレットタウン大観覧車		920 円	あり	近隣にあり
5	e	ウェストミンスター寺院		約 4,000 円	あり	あり
	f	セント・ポール大聖堂		約 3,600 円	あり	あり
	e'	明治神宮		宝物殿 500 円	あり	敷地内にあり
	f'	浅草寺		無料	あり	近隣にあり
6	g	ザ・シャード(展望台)		約 5,190 円から	なし	あり
	g'	東京スカイツリー		2,060 円から	あり	あり

*入場料は 2015 年 8 月現在、大人 1 名の料金（英国通貨は 1 ポンド 200 円として換算）

東京では4,100円で済む。日本の物価は高く、外国人にとって来にくいところだと言われて久しいが、事実は異なっている。ロンドンも、インターネットによる事前予約割引、市内の観光名所を回しやすいするための「シティ・パス」等を用いればもっと安い金額で済むが、それでも東京よりは大幅高くつく。しかしここで筆者が注目したいのは、ロンドンの観光名所には「王室」を身近に感じられるスポットが4箇所含まれているという点である。

1-aのバッキンガム宮殿はエリザベス女王夫妻の住まいであり、建物内部が見学できる。公開されている場所は女王夫妻が居住に使用しているプライベートな空間ではないが、同じ建物内に女王とその夫君が住んでいると思うと、観光客は皇族を身近に感じ、また優雅な気分に入ることができるだろう。敷地内にはカフェテリアがあり、そこでお茶をのみ、そして売店では実に様々な王室グッズを購入することができる。(そして、宮殿外でもロンドン中の土産物店では、王族の写真の入ったハガキ、カップなどがたくさん並んでいる。)最近ではウィリアム王子夫妻が挙式後にこの宮殿の屋外バルコニーから国民に手をふった姿が世界中で報道され、「イギリス王室＝バッキンガム宮殿」のイメージは定着している。一方、東京の皇居(1-a')の見学では建物内に立ち入ることではない。新年の一般参賀の際は建物近くまで行くことが許されるが、手をふる皇族は厚いガラスの向こうである。皇居周辺は決して観光地と言える地域でもなく、土産物店もなければ、皇族グッズもほとんど市販はされていない。

2-bの国会議事堂見学では女王の着替えの部屋に入場し、議場で女王が着席する椅子も間近に見ることができる。日本(2-b')でも天皇陛下の休憩室や皇族室を見学することはできるが、陛下が議場で着席する椅子は傍聴席から遠目に見るだけである。

3番目のウェストミンスター寺院(5-e)はダイアナ妃の葬儀、ウィリアム王子夫妻の結婚式が執り行われた場所であり、4番目のセントポール寺院(5-f)はチャールズ皇太子とダイアナ妃が結婚式を挙げた場所である。これらの様子も世界中に中継され、文字通り「お姫様」となる花嫁の純白でベールの裾の長いウェディングドレスに魅了された女性が多いだろう。一方、日本では男子皇族の挙式は皇居内で執り行われ、その様子は公開されない。(女性皇族が皇族でない男性と結婚する場合は、結婚と同時に皇族の資格を失うことから、皇居外の一般式場で行われるのが通例であり、その一部は公開、報道されている。)

以上、ロンドンでは4つの王室ゆかりの観光名所を訪ねることで、観光客は英国王室への親近感を強く持つに違いない。エリザベス女王やウィリアム王子夫妻はイギリス(の主にロンドン)にしかない人たちである。直接会うことがかなわないにしても、身近に感じることができる場所が公開されているというのは、観光客にとって魅力的である。一方、東京の場合、皇族の姿はまだ神秘的なベールの向こうにあるというイメージを抱くのではないだろうか。ロンドンでは、バッキンガム宮殿の他に、ウィリアム王子夫妻公邸のケンジントン宮殿、チャールズ皇太子夫妻とヘンリー王子公邸のクラレンス・ハウスも一部が一般公開(有料)されているが、日本の皇太子ご一家、秋篠宮ご一家などの住まいがある赤坂御用地は一切公開されていない。

「はじめに」に書いたように、英国では王族や貴族ゆかりの邸宅が数多く公開され、宿泊や結婚式まで行うことができる。一方日本にも、旧華族の屋敷がいくつも残っており多くが公開されているが、明治から昭和初期に建てられたのはその多くが洋風(洋館)である。和風宿泊施設である箱根の富士屋ホテル別館菊華荘は皇室の御用邸として1895年に建てられ、現在は一般客も一泊3万

円代から宿泊できるが、部屋は3室のみ。また、旧華族の山科伯爵邸であった京都の洛陽荘（和風旅館）も一泊3万円代から宿泊できるが、このような施設は数えるほどである。経済アナリストで現在は文化財の修復を手がける会社の取締役であるイギリス人のデービッド・アトキンソン氏が著書『新・観光立国論』において、大変興味深いことを指摘している。まず、来日の外国人観光客数ランキングでトップ7のうち、アジア・オセアニアの国々がそのうち6つを占めているが、国民一人あたりの観光支出額ランキングのトップ7のうち5つを欧米の国々が占めている。つまり、観光に多くの費用を費やす欧米の観光客はあまり訪日していないことを意味している。また、アジアからの観光客と欧米からの観光客では後者のほうが滞在日数が長いのは、欧米から日本までは距離が遠く、わざわざ出かけていくのだから、ゆっくりたっぷり楽しもうという心理が働くというのである。お金を多く落としてくれる欧米からの観光客を増やすために必要なこと、その一つが、日本でしか見聞できないもの、体験できないことの提供であり、そのために文化財の保護や公開が欠かせないとアトキンソン氏は提言している。

日本の大手旅行会社の販売する英国ツアー旅行で、貴族の邸宅に宿泊するものを調べてみると、個人で予約すれば1泊1部屋5万円以上のものが含まれることもあり、パック旅行で宿泊するほうが割安である場合が多い。また、このような邸宅はたいてい広大な敷地内にあることから、公共の交通機関を使って行くには不便であることが多く、その点チャーターのバスで現地まで行くことのできるツアーは個人旅行者にとって大変都合がよい。ロンドン郊外に位置するグレート・フォスターズはエリザベス1世ゆかりの城館であるが、ヒースロー空港から車で20分という近さであるので、タクシーを利用したとしてもそう高い交通費にはならないだろう。素泊まりで一人一泊約1.5万円（ダブルルーム利用の場合）から宿泊できるが、ディナーや朝食をとればやはり合計で5万円近くはかかるであろう。それでも、夢のような体験ができるのであればぜひ泊まりたいという外国人客は少なくないであろう。事実、英国のマナーハウス、貴族の邸宅は宿泊施設として人気を得続けている。英語に自信がない人は、個人での旅行を不安に思うかもしれない。それを考えると食事付き9泊（英国内7泊）で約30万円のツアー旅行は手軽で利用しやすい⁷⁾。

日本でも外国人向けのツアー旅行は増えており、歴史ある寺社仏閣の見学や温泉入浴などが含まれており、和風旅館での宿泊もあるが、残念ながらそれは武家や大名、皇族とはゆかりのない宿泊施設にすぎない。東京都所在の旧華族の邸宅で公開されているもの、旧岩崎邸（台東区）、旧前田公爵邸（目黒区）、旧朝香宮邸（港区）、旧小笠原伯爵邸（新宿区）、旧島津公爵邸（品川区）などはいずれも洋館で宿泊はできない。欧米人にとって「洋館」は珍しいものではない。武家屋敷や古民家のほうが日本でしか見ることのできない独自のものである。もしそのような施設で快適に過ごすことができ美味しい食事が提供されるのであれば、彼らは喜んで高い料金を払ってでも宿泊したがるのではないだろうか。この10年で外国人観光客が激増した国内観光スポットがある。三重県伊賀市にある伊賀流忍者博物館を訪問した外国人観光客は2004年には3,600人にすぎなかったが、2014年には18,000人に上った。ホテル・伊賀上野観光協会・伊賀鉄道の3者協賛による「忍者体験パック」で客は津市内のホテルに宿泊して「忍者鍋」を食べ、忍者の衣装に着替えて博物館に向かう。博物館では展示物や忍者ショー見学に加え、手裏剣打ちを体験する。では、首都東京でしか体験できないこととは何か。外国人客が「来てよかった」「今度は家族や友達と来たい」と思うようなものを提供できるか。観光都市東京の課題は多い。

5. おわりに

これまで見てきたように、英国王室が自らを観光資源化し宮殿や関係施設を公開し皇室グッズを販売するようになったのには二つの理由がある。ひとつは、先に述べたように国民からの支持を維持するためである。もうひとつが「王室費」削減問題である。AFP通信が伝えたところでは、2013年度の王室費は3,570万ポンド（約62億円）に上り、これは国民1人につき56ペンス（約100円）の負担に相当した。好景気の時はその問題にならないが、王室の維持にかかる費用を国民が負担することには以前から強く反対する者が少なくない。王室への批判が強まった、チャールズ皇太子離婚後にはいっそう風当たりが強くなり、王室は「開かれた王室」をいっそう求められると同時に、国民の負担を軽くして批判をかわす必要があった。1992年にロンドン郊外のウィンザー城（女王の週末の住居）で火災が発生し、その巨額の修復費用補填のためバッキンガム宮殿は翌1993年に公開が開始された。

エリザベス女王の個人資産は、約575億円と推計されている。また、イギリスの国有財産であるバッキンガム宮殿の資産価値は約5,750億円、王室が所有する不動産の価値は約1兆1,500億円と推計されている。イギリス王室はDuchy of LancasterとDuchy of Cornwallという計約305 km²にもなる二つの王族公領を所有しており、2011年においてそこから上がる収益はそれぞれ1,338万ポンド（約23億円）、1,720万ポンド（約30億円）と推計されている⁸⁾。一方、1997年、当時のブレア首相率いる労働党政権のコスト削減政策により王室は専用船ブリタニア号を退役させ、エリザベス女王が公衆の面前で涙を見せたことで話題となった。王室は2012年まで国会承認のもと王室費（内訳＝スタッフの制服の一部支出、スタッフの給与、宮殿等維持費）が支払われていたが、2013年から支払われなくなった。しかし、以前から王室メンバーの個人収入は代々受け継がれた領地・個人資産の運用から得ており、ロンドン塔の王冠などの財宝の観覧入場料を1983年から徴収し年間250万人の入場者で売上30億円、バッキンガム宮殿の観覧入場料を1993年から徴収し売上32億円、ウィンザー城観覧入場の収入が有り、王室領の不動産の地代やテナント料など推定総資産は9,000億円で、政府からの王室費52億円が支払われなくても問題は無いというのが事実である。しかし、現在は安定した人気を誇る王室も、いつ何時ふたたび危機に陥るかは誰にも予測できない。エリザベス女王夫妻の長男チャールズ皇太子は不倫と離婚、長女アン王女も離婚、次男アンドリュー王子は児童買春疑惑など、王室にまつわるスキャンダルは少なくない。チャールズ皇太子の次男ヘンリー王子も未成年時代から飲酒・喫煙、乱痴気騒ぎなど数々の騒ぎをおこしてきた。さらに女王にとって最も近い存在である夫君のエジンバラ公も度々の失言・暴言で有名であり、女王には気の休まるときがないと言っても過言ではないだろう。だが、イギリス国民は「フィリップ殿下がまたやってくれた！（Prince Philip did it again!）」と大喜びし、英マスコミ各社もネタ欲しさに待ち構え、そのためどこか憎めないお爺ちゃんとして定着している。このようなことが日本の皇室にあるだろうか。オープンさという点では、日本の皇族は英国王室にかなり遅れをとっていると言わざるをえないであろう。宮内庁HPを閲覧すると更新の頻度も高く、日本も「開かれた皇室」を目指して努力を続けている様子が見て取れる⁹⁾。皇居や皇室ゆかりの場所や施設の公開も少しずつではあるが増えてきている。それでも英国王室のオープン度に比べるとかなりの差があることは歴然だ。

日本でも週刊誌の見出しに皇族の名前が出ることは少なくなく、皇族に対する国民の関心度の高さを裏付けている。王室、皇室というものに対するそれぞれの国民の考え、親近感の違いを簡単に比較することはできないし、例えば皇居の一般公開回数を増やし土産物店や食堂を設置するとしたら、皇族の品格を損なうものだと眉をひそめる人もいるだろう。日本では貴族（華族）も今は存在しておらず、それを生きた観光資源化するには困難が予想される。和風の建築物は洋式建築に比べ耐久性に劣り、戦災や火災、震災で消失したものも多い。しかし、このような価値観や特徴の違いをふまえたうえで、遠来の外国人観光客が増え、彼らが高い観光支出を厭わないようにするためには何が必要か。2019年、2020年のラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、今後ますます多くの外国人が東京を訪れるだろう。それらの人たちに、イベントと関係なく再び来日してもらえるようにするために、「おもてなし」や「治安のよさ」だけではない、日本だけの特別でオリジナルな施設や体験を提供することを急ぎ検討し実行に移すときにきている。東京オリンピック開催招致活動における高円宮妃久子様の存在感やご活躍が内外で高く評価されたことを思い出せば、開かれた皇室をめざす皇族の方々に英国王室のようなアピールやオープンさを期待し、観光大国日本の顔となって頂きたいと思うことは決して行き過ぎたものではないはずだ。

[参考文献・参照 HP]

- ・ Kristie Brewer ‘Why Downton Abbey is a global success story’ (18 September 2014) <http://www.high50.com/culture/article-culture/downton-abbey-why-its-a-global-hit>
- ・ Charlotte Runcie ‘Why Americans love Downton Abbey more than ever’ (07 Jan 2014)
- ・ Why American love Downton Abbey more than ever, [http://www.telegraph.co.uk/culture/tvandradio/downton-abbey/10555601/](http://www.telegraph.co.uk/culture/tvandradio/downton-abbey/10555601/Why-Americans-love-Downton-Abbey-more-than-ever.html) Why-Americans-love-Downton-Abbey-more-than-ever.html
- ・ 海保 眞夫『イギリスの大貴族』平凡社,1999
- ・ 笠原 敏彦『ふしぎなイギリス』（講談社、2015年）
- ・ 小池 滋『イギリス』新潮社
- ・ コリン・ジョイス著、森田浩之訳『「イギリス社会」入門』（NHK出版、2011年）
- ・ 今 祥枝「英『ダウントン・アビー』世界中で人気の謎」東洋経済オンライン（2014年9月5日号）<http://toyokeizai.net/articles/-/46698>
- ・ 田中 亮三『英国貴族の暮らし』河出書房新社,2009
- ・ デービッド・アトキンソン『新・観光立国論』東洋経済新報社,2015
- ・ mr partner No.323（株式会社ミスター・パートナー、2015年）
- ・ 森 護『英国の貴族』大修館書店,1987
- ・ 山内 史子『英国貴族の館にとまる』小学館、2005
- ・ 山田 勝『イギリス貴族』創元社,1994

[注釈]

- 1) エリザベス女王の長女アン王女の夫ティモシー・ローレンス氏には爵位や敬称がなく、「海軍中將」（Vice-Admiral）の肩書きを使っている。

- 2) [https://www.ipsos-mori.com/researchpublications/researcharchive/poll.aspx?oItemId=122 &view=wide](https://www.ipsos-mori.com/researchpublications/researcharchive/poll.aspx?oItemId=122&view=wide)
なお、本文中で言及の Ipsos MORI の調査結果はすべて <https://www.ipsos-mori.com/> によるものである。
- 3) ウィリアム王子の正式称号・敬称は His Royal Highness Prince William Arthur Philip Louis, Duke of Cambridge, Earl of Strathearn, Baron Carrickfergus, Royal Knight Companion of the Most Noble Order of the Garter (ケンブリッジ公爵、ストラザーン伯爵、キャリクファーガス男爵、ガーター勲章ロイヤル・ナイト・コンパニオン、ウィリアム・アーサー・フィリップ・ルイス王子殿下) というが、Prince William, Duke of Cambridge (ケンブリッジ公爵ウィリアム王子) と呼ばれることが多い。また、大学時代には William Wales と名乗っていた。
- 4) http://www.forbes.com/billionaires/#version:static_country:United%20Kingdom
- 5) <http://www.e-unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284417414>
- 6) <http://www.mori-m-foundation.or.jp/gpci/index.html>
- 7) 阪急交通社 HP
http://www.hankyu-travel.com/tour/detail_i.php?p_course_id=E090LH&p_hei=30
- 8) Annual Reports of Duchy of Lancaster および Annual Reports of Duchy of Cornwall 参照 (<http://duchyofcornwall.org/>、<http://www.duchyoflancaster.co.uk/management-and-finance/accounts-annual-reports-and-investments/>)
- 9) 宮内庁 HP <http://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/kunaicho/yosan-ichiran.html>

A Study on the Success of the TV Drama *Downton Abbey* – the British Peerage as the Tourist Attraction

Kaoru SATO

The British TV drama, *Downton Abbey* has watched the huge success not only in the UK but also all over the world. The Highclere Castle, a shooting place of the drama, welcomes over 60 million visitors every year. This paper tries to analyze the success of the TV drama series *Downton Abbey*, and show how the British royal family has attempted to keep popularity among people in the UK and earned a lot of money by making themselves tourist attractions as well as many of the British peerages have done so.

Key Words: drama Downton Abbey, royal family, British Peerage, tourist attraction, originality, specialty